

みんな私のいいお母さん

王国軍

(訳 横田勤)

彼は駅でいなくなった。その年、彼は4歳だった。おばあさんは彼を連れて駅へ散歩に行った。アイスクリームを買ってあげると言っておばあさんが行ってすぐ、一人の女がやって来た。「おばあさんは用事があって行っちゃったので、私が遊びに連れていくことになったのよ。」彼女はそう言うと、彼を貴州まで連れていったのだ。

彼が生みの母親のところに戻ったのは、十年後のことだった。彼の部屋の飾り付けは十年前のままであり、母親は毎日一回掃除をしていた。彼が入って来た時、母親は笑いながら言った。「覚えているわ。小さい時、お前は每晚眠るとき、大好きなパンダを抱いて眠ろうとし、自分の弟だと言っていたのよ」

パンダはまだそこにあり、彼はそれを抱いたとき、涙が急にあふれ出てきた。彼が誘拐されて貴州へ行ったその年、さかのぼること九年前にこの人さらいが捕らえられたあと、彼はやっとすきを見て逃げ、さまよいながらある村にたどり着いた。そして善良で穏やかな農民夫婦のもとに引き取られた。生活は貧しかったけれども、養父母はずっと変わらず彼に優しく接し、面倒を見てくれた。

7歳のとき、彼は養父といっしょに山に登り薬草を採った。10歳のとき、彼は一人で畑へ行って農作物の刈り取りができるようになった。13歳のとき、養父母が病気になった。彼は小さくて弱いその肩で、家を支えることになった。

しかし彼は、生みの母親が自分を探すために会社を妹に任せ、十年間彼を探していたとは、思ってもいなかった。十年が経った。彼女の素晴らしい青春の十年間は子供捜しに費やされた。彼女は数十足の靴を履きつぶし、子供捜しの日記を十冊書き上げ、彼がいる小さな町で代用教員となった。

生みの母が彼の家の玄関に入ったとき、彼はすべてが本当のことだったのだと信じた。養父母は彼を生みの母親のそばにやり、養父が言った。「先生、あなたの事情はすべて知っていました。私はとてもつらかった。この数年、自分からあ

なたのところに行くことをしなかったのですから。この子ももう 14 歳になりました。ものごとが分かるようになりました。あなたたち親子は一緒にいなければならない時がきました。」

彼のほうは、涙を流しながら貴州を離れた。離れたくなかった。しかし養母が言った。「お前のお母さんはお前を探すために、仕事も捨て、家族もばらばらになった。あの人の苦しみと比べたら、私たちはとても幸せだったし、もう十分満足したよ」

母親は彼を連れて服を買いに行った。これは、彼が初めて着る高い値段の服であった。母親は彼を最もよい学校へ連れて行き学ばせた。広々として明るい教室の中に座っていると、彼は突然、自分が小さな子供であるように感じた。彼は何も理解できなかつたからだ。英語も分からず生活のしかたも分からず、さらに、町の人間との意思の疎通もうまくいかなかつた。彼は強い劣等感を感じ、こっそりと母親に一通の書置きをして、貴州へ戻つた。

母親はこれを知つても彼を責めなかつたが、養父母は許さなかつた。お互いに話してわかり合つたのに、ただ何日かでもう逃げてきたのは不誠実だと言つて、無理やり彼を駅まで送り届けた。彼が再び母親を見たとき、母親の髪はまたいつそう白くなつていた。親戚の者が言つた。「もしこんどお前を失うようなことになったら、お母さんはもう生きる勇気をなくしてしまふだろう。」彼は初めて母親を抱きしめながら泣いた。母親も泣いた。彼はやつと分かつた、彼を生み、していたのに彼を失つてしまつたこの女の人は、彼をこれほど深く愛していたのだ。たとえ時が過ぎ去り二度と巡つてくることなくても、彼はずっと彼女にとっての宝物であり、唯一の存在だつたのだ。

連絡が便利になつると、母親は彼と養父に携帯電話を渡した。彼はいっしょうけんめい勉強して、それからすぐ、学校で首席をとつて市の第一中学校へ進学した。

母親は、生活がこのように、段取りを踏んで続いていこうと思つていた。実は彼女は、子供が大学に進学するのを待つて養父母を迎え、一緒に暮らそうと、ちゃんと考へていたのだ。ところが、それから十日も経たずに、彼の養母に事件が起きた。脳溢血を起こしたのだ。

医者は、治療するのにかかる費用は全部で十萬元を超すと言つた。

母親は直ちに戻つてくると、人を仰天させることをした。彼女が心血を注いで

二十年間経営した会社を安値で売ったのだ。他人はみなわけが分からなかった。理由を知っているのは彼だけだった。

母親は言った。「この世界で、愛よりも大切なものが何かありますか？ 息子を迎えて帰って来たその日に、私は決めたのです。子供には楽しい小鳥のように、肉親の愛情の海の中で、自由に空を羽ばたいてもらいたいと。」

その時、彼はもう涙をがまんすることができなかった。誘拐されてからかなり長いあいだ、彼は生みの母親をととても憎んでいたのだが、生みの母親は、一年の時間をかけて、ゆっくりと彼の心の中の氷の塊を溶かしたのだ。

三年後、彼は大学に進学した。母親は養父母を子供の大学の近くに迎え、一軒の家を借り、みんなで一緒に楽しく暮らしている。毎日、みんないっしょに夕日の中を散歩している。楽しさと幸せがずっと彼らを包み込んでいる。彼は言った。「あなたたちはみんな私の母親であり良き父親です。私はずっとあなたたちに親孝行しますからね……」

(『中国微型小説排行榜 2012 年』百花洲文芸出版社，南昌市，2013，pp. 239-241.)



(中国語原文)

都是我的好妈妈

王国军

他是在火车站丢的，那一年，他4岁。奶奶带他去火车站散步，说给他买冰激凌，刚走，一个妇女走上来说，你奶奶有事去了，让我带你去玩。这一带，便把他带到了贵州。

等他再回到生母的身边时，已经是十年后。他房间的摆设还是十年前的模样，母亲每天都会打扫一次。他进来的时候，母亲笑着说：“小时候，我记得你每天睡觉时，都要抱着你最爱的熊猫睡觉，还说它就是你的弟弟。”

熊猫依然在，抱着它的时候，他泪水一下子就涌出来了。那年，他被拐到了贵州，直到九年前这伙人贩子被抓了，他才趁机跑了，流浪到一个村里。被一对老实巴交的农民收留。尽管生活贫困，但养父母依然给他最温馨关怀。

7岁，他跟着养父上山采药；10岁，他已经能独自去田里收割稻谷；13

岁，养父母病了，他又用弱小的肩膀扛起了这个家。

可他没有想到的是，他的生母，为了找他，把公司交给妹妹打理，找了他十年。十年了，她十年的美好青春就耗费在了寻人上；十年，她磨破数十双鞋，写满十本寻子日记，还在他所在小镇上当起代课老师。

生母进他家门的时候，他才相信这一切都是事实。养父母把他送到她的身边，养父说：“老师，你的事情我都知道了，我很难过，这些年我没有主动去找过你。他现在14岁了，懂事了，是该让你们母子团圆的时候了。”

他是流着泪离开贵州的，他舍不得离开，可养母说：“你母亲为了找你，工作不要了，家庭也散了，相比她的苦，我们已经很幸福了，我们知足了。”

母亲带他去买衣服，这是他第一次穿这么贵的衣服。母亲带他去最好的学校上课，坐在宽敞明亮的教室里，他突然觉得自己像个小丑，因为他什么都不懂，不懂英语，不懂生活，更不善于和城里人沟通。他感到强烈的自卑，便悄悄地给母亲留了一封信，回到了贵州。

母亲知道后，也没说他，可是养父母不同意，说才相认几天，就跑过来，不厚道，便强行送他到了火车站，他再见到母亲，她的头发又白了很多。亲戚说：“要是再把你丢了，你母亲都没活下去的勇气了。”第一次，他抱着母亲哭了，母亲也哭了，他才知道，这个生他爱他却把他丢了的女人，爱他爱得如此之深，即使光阴老去，年华不再，他依旧还是她的宝贝，她的唯一。

为了方便联系，母亲给他和养父都配了手机，他努力学习，不久后便以学校第一名的身份考进市一中。

母亲以为生活就会如此按部就班地继续下去，其实她都想好了，等孩子考上大学，就把他的养父母接过来，一起好好过日子。只是没过十天，他的养母出事了，脑溢血。

医生说，整个治疗康复的费用要十多万元。

母亲第一时间赶回去，做了件很惊人的事情，把她费尽心血经营了二十年的公司低价卖掉了，其他人都不解，只有他知道原因。

母亲说：“这个世界上还有什么比爱更重要呢？从接儿子回来的那天起，我就决定，要让孩子像一只快乐的小鸟，在亲情的海洋中自由翱翔。”

那时，他的眼泪再也没有忍住，被拐走之后，在很长一段时间里，他是痛恨他的生母的，而生母，用了一年的时间，才慢慢化解了他心中的冰块。

三年后，他考上了大学，母亲把养父母接到了孩子所在的大学旁，租了

一套房子，大家一起快乐地生活。每一天，他们都在夕阳的余晖里散步，快乐和幸福一直围绕着他们。他说：“你们都是我的好妈妈、好爸爸，我会永远孝敬你们……”

